

■ 清流劇場「オイディプス王」

清流劇場の「オイディプス王」(9日、伊丹市のアイホールで所見、ソポクレス原作、田中孝弥構成・演出)は、古代ギリシャ悲劇に現代的テーマを見出した意欲作。翻訳も新たに、主人公の自我の発見に力点を置き、舞台化した。

テーバイ王のオイディプスは神託を受け、疫病に苦しむ民を救うため、前王殺しの犯人を探し、処刑しようとした決意。だが予言者らの話から、昔自分が殺した見知らぬ男こそ前王で、しかも実父と判明。さらに妻は、実母だったとわかる。彼は幼い頃、災いの子という神託を受け、故郷を離れ、実の親を知らなかったのだ。彼は真実の見ていなかった自らの目を刺し、贖罪する。



高口真吾④が演じるオイディプス王は前王殺しの犯人捜しに乗り出す＝古都 栄二撮影

ギリシャ悲劇に現代反映

神託や運命に翻弄された男にも思えるが、今回の翻訳(丹下和彦)と演出では、オイディプスがすべての災厄を自らの責任として引き受ける覚悟を強調。悲劇的な結末だが、オイディプス役の高口真吾は、真実を知ったことでむしろ力強さを増す人物像を造形。禍は自分だけに留め、子に降りかかるまいとする、父としての信念を際立たせた。

詩的な台詞のリズム感を活かし、小劇場だがマイクを使用、肉声とのコントラストで強弱を利かせた。ピアノ生演奏と相乗効果をなし、繊細な聴覚表現が集中度を高めた。

クロス(合唱隊)役の俳優達は仮面を付け、民衆を象徴。権力者が変わると全員で力ある者の方に移動。民意の移ろいやすさを暗示した。

現代社会の諸問題が未来に影を落とさないためには、国民一人一人が積極的に真実を知る姿勢と、自分の責任として考える知性が不可欠だ。その必要性を、古典の名作を通して改めて現代人に問いかけた舞台だった。

(大阪芸大短期大学部准教授